

1 公立大学法人札幌市立大学の年度評価の方法

- (1) 年度評価は、「項目別評価」及び「全体評価」により行う。
- (2) 項目別評価は、各事業年度における中期計画（年度計画）の次に掲げる事項（大項目）の進捗状況の確認又は評価を行う。
 - ① 大学の教育研究等の質の向上
 - ② 業務運営の改善及び効率化
 - ③ 財務内容の改善
 - ④ 教育及び研究並びに組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価並びに当該状況に係る情報の提供
 - ⑤ その他業務運営
- (3) 項目別評価に当たっては、まず、公立大学法人から提出された業務実績報告書（公立大学法人の業務実績や公立大学法人において作成した年度計画の達成状況に係る自己評価結果を記載したもの）等を検証し、年度計画の記載項目（小項目）ごとの事業の進捗状況について、次に掲げるⅠ～Ⅳの4段階で評価を行う（小項目評価）。公立大学法人による自己評価と評価委員会の小項目評価が異なる場合は、その理由等を示す。

Ⅳ：年度計画を上回って実施している。

Ⅲ：年度計画を十分に実施している。

Ⅱ：年度計画を十分には実施していない。

Ⅰ：年度計画を実施していない。
- (4) (3)の結果等を踏まえ、年度計画の大項目ごとに、事業の進捗状況について次に掲げるS～Dの5段階で評価を行う。

S：特筆すべき進捗状況にある（評価委員会が特に認める場合）

A：計画どおり進捗している（小項目評価の結果がすべてⅣ又はⅢ）

B：おおむね計画どおり進捗している（小項目評価の結果に係るⅣ又はⅢの割合が9割以上）

C：やや遅れている（小項目評価の結果に係るⅣ又はⅢの割合が9割未満）

D：重大な改善事項がある（評価委員会が特に認める場合）
- (5) 全体評価は、項目別評価の結果等を踏まえ、中期計画（年度計画）の進捗状況全体について、総合的に評価を行う。

2 全体評価

(1) 総評

平成18年4月に開学した公立大学法人札幌市立大学は、平成21年度に学部が完成し、平成22年4月には、デザイン研究科と看護学研究科の大学院修士課程を設置するといった、間断なく大学を発展させている。開学時より、デザインと看護に共通する「人間重視」の考え方を常に基本として教育研究を行っており、デザイン分野と看護分野における有為な人材の育成・輩出と地域に根ざした公立大学として、より高度な教育研究機能を備えたことから一層の地域貢献が期待されている。

平成22事業年度の業績評価としては、「項目別評価」の結果では、3項目でB評価（おおむね計画どおり進捗している）とし、そのほかの2項目についてはA評価（計画どおり進捗している）となっており、年度計画の小項目ごとの評価からも、全体としては、行うべき事業を行い、順調に業務を遂行していると評価できる。

なお、項目別評価の基礎資料となる公立大学法人札幌市立大学が策定した平成22年度の年度計画の記載項目（小項目）ごとの評価（小項目評価）においても、小項目数187項目のうち、4項目がIV評価（年度計画を上回って実施している）、175項目がIII評価（年度計画を十分に実施している）となっており、これらを合わせると187項目中179項目（95.7%）が年度計画実施の水準を満たしている。

また、毎年度の詳細な年度計画の評価等を通じて、大学業務全般にわたって改善に取り組んでいることが、平成22事業年度報告書からもうかがえた。

(2) 年度計画の大項目ごとの評価の主要なポイント

年度計画の大項目ごとの評価の主要なポイントは、次のとおりである。

ア 大学の教育研究等の質の向上

(ア) 教育

両学部の学生が専門分野を学ぶ上で、問題点の発見や課題解決等の手法を学ぶ「スタートアップ演習」については、大学をあげて取り組み、入学直後からデザイン学部と看護学部の連携を意識させ、広い視野をもつことができる教育を実践している。また、地域の様々な課題を取り上げ実践的な教育を進めている。

研究科では、長期履修学生制度が機能し、社会人学生の受入れに寄与している。

一方、前年度評価でも指摘をしているが、現在の学士課程教育にかかわる基本的な問題が正しく理解されていないと思われる点もある。教育の効果を測定することはもとより容易ではないが、全国レベルではこの数年の間に長足の進歩が見られる。キャップ制、GPAなど基本的な概念を押さえた上で、アウトカム評価の開発に早急に取り組むべきである。この件については、学内に成果の蓄積が確認できるよう、専門的知識を持った人材の養成が必要である。

これに関連して、質の高いシラバス作成や継続した授業アンケートなど優れた取り組みがなされているにもかかわらず、それらの成果が効果的に内外に発信されていると言えないのは残念である。その弱点が、年度評価などの報告の質にも影響を与えている。継続して成果を整理・蓄積し、効果的に発信するシステム及び人材の開発が望まれる。

受験者の全体的な人数としては、順調であるが、性別比などに立ち入ってみると一方に偏る傾向が顕著になっている。アドミッションに関しても、中長期で戦略を立てることができる人材が必要である。

今後は、サテライトキャンパスの地理的優位性を利用して、他大学と連携し、より先進的な教育改革に本格的に取り組むことを期待する。

(イ) 研究

札幌市や道内市町村の地域課題に即し、地域と密着した研究を実施している。地域看護や在宅看護に関する講座では受講生が高い満足を得ているとともに認定看護管理者認定審査に受講者全員が合格している。デザイン研究科では、大学院生が各種賞を受賞し、札幌市立大学の知名度の向上に貢献している。

一方、科学研究費補助金の申請は、目立った進歩が見られなく、大学全体として申請率を上げる積極的な取り組みを期待する。

(ウ) 地域貢献

大学の国際化については、これまで評価委員会では進展の遅さを指摘してきたが、平成22年度においては、海外大学の交流の活発化、留学生の受け入れなどが徐々に進展していることが確認できた。今後は、大学院の機能を活かしより戦略的かつ積極的に展開していくことを期待する。

一方、札幌圏の大学との連携や産業界との連携については進展が見られない。地域連携研究センターが中心となって進めていく課題ではあるが、大学のミッシ

ョンと密接に関連してくることから、地域連携研究センターのみならず、大学としての方針を明確にして、戦略的に取り組む必要がある。

イ 業務運営の改善及び効率化

理事長のリーダーシップにより経費の削減に努めている。学長裁量経費については、戦略的経費であるので、経営戦略を推進していくための執行を期待する。

市の派遣職員から順次プロパー職員への切り替えを着実に進めているが、平成22年度には、プロパー職員が3名も退職している。職員の定着率を高め、専門性の高い職員の育成をしていく必要がある。

教員評価制度については、教員の教育研究活動を活性化させる制度として、継続的に改善に努める必要がある。

ウ 財務内容の改善

看護学部の「学社連携による循環型就業力育成プログラム」が、文部科学省の「大学生の就業力育成支援事業」として採択され、大型の外部資金を獲得した。

エ 教育及び研究並びに組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価並びに当該状況に係る情報の提供

平成23年度の認証評価機関の評価を受けるための準備を滞りなく進めた。

オ その他業務運営

大学の知的資源の活用や電気・ガス等の消費量の分析を更に行い、効果的な省エネルギー対策を進めていくことを期待する。

(3) 今後の課題

- ・ 札幌市立大学の求める学生が受験し、入学しているかを継続的に検証し、入学者選抜方法等の見直しを行っていくことを望む。
- ・ 年度計画の小項目全てにマネジメントサイクルによる管理が必要である。平成22年度は、不十分な項目が散見された。
- ・ 当初の年度計画の設定が適切ではなかった項目があること自体問題ではあるが、年度計画の変更という形で適切に処理されていない例があったことは、自己評価の目的から鑑みて大きな問題である。自己評価は、大学の教育研究等の質的向上を目指して実施するものであることを再認識されたい。特に優れた取り組みの成果のみならず、計画設定のミス、その後の取り組みの遅れ等についても自覚的に記述し、

その理由と対策を考えることが重要である。それがマネジメントサイクルを機能させることにつながる。

- 報告書全般にわたって、取組内容を網羅的に記述する傾向がある。年度計画に対する報告とは、取組結果を評価し、成果と課題を明らかにして、どのように改善していくのかを記載するものである。次年度の報告書は、年度計画を「P (P l a n)」として、実施状況・判断理由等の欄に「D (D o)・C (C h e c k)・A (A c t)」に沿った簡潔かつ明確な記載になることを望む。

3-1 教育研究等の質の向上に関する項目別評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

B（おおむね計画どおり進捗している）

イ 判断理由

この項目についての小項目評価の集計結果では、小項目数125項目に対して、「年度計画を上回って実施している（Ⅳ評価）」又は「年度計画を十分に実施している（Ⅲ評価）」と評価されたが項目120項目であり、全体に占めるその割合が9割以上であることから、B評価（おおむね計画どおり進捗している）とする。

（参考）小項目評価の集計結果

小項目数	評 価 結 果				Ⅳ又はⅢの 割合
	Ⅰ 実施せず	Ⅱ 十分実施せず	Ⅲ 十分実施	Ⅳ 上回って実施	
125	0	5	116	4	96%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

(ア) 年度計画を上回って実施している項目として、次のものが挙げられる。

- ・ 各種関係機関との連携による地域に貢献できる人材の育成、知的資源の地域への還元については、多様な講師の活用をはかる授業が展開されるとともに、公開講座等において、積極的に大学の知的資源が還元されている。
- ・ eラーニングシステムが授業に有効であることが認識され、次第に利用が広がっている。
- ・ 将来の看護職の動機付けや看護の働きかけを体験的に学ぶための実践的な教育が行われている。
- ・ 大学院では、デザインと看護の連携した地域課題に関する研究をしていることや大学院生が「2010アジアデジタルアート大賞展」で入賞するなど大学院開設一年目から札幌市立大学の知名度を向上させる成果があった。

(イ) その他、次に掲げる点が注目される。

- ・ 第一期卒業生の追跡評価を実施したことは高く評価できる。今後は調査票の回収率をあげるための工夫を期待する。
- ・ 高校訪問や進学相談会参加を積極的に行い、入学志望者の確保に努力している。今後、インターネットによる情報提供の重要性がますます高まることから、ウェブサイトのアクセスデータの分析などを行い、より効果的な情報提供を行っていただきたい。
- ・ 地域の様々な課題を取り上げた実践的な授業や地域の特色を生かした教育については、地域社会や学外機関と連携したフィールドワークで実績を積み重ねている。
- ・ 公開講座の受講者の満足度が高い。
- ・ 平成19年度以降課題として指摘きた留学生の受け入れについては、デザイン学部では、最初の外国人留学生を受け入れている。平成23年度においてデザイン学部及びデザイン研究科において入学予定の留学生が5名いることから、留学生へのインタビュー調査などにより志望の動機を分析し、効果的な広報活動を行うなど、今後の留学生の受け入れの参考にして欲しい。
- ・ 海外の大学との交流はしだいに活発になりつつあると認められる。今後、より戦略的な見通しをもった重点的な連携や大学院での積極的な海外大学との共同研究等を期待する。

イ 遅れている点

- ・ キャップ制を「履修科目数の平均」と混同していると思えない記述があった。報告にある Semester あたり 23 単位は上限としても高いと言われている。現状の単位の取得状況では、大学設置基準の学習時間が守られていないことになる。GPAの活用については年度計画が達成されていない。
- ・ 産業界との連携はまだ予備的段階にある。連携の努力は断片的で中長期の戦略がはっきりしない。
- ・ 研究成果を教育課程へ反映した活用例を収集した事例集を作成することになっているが、平成22年度には作成できなかったことや、研究成果の教育課程・講義へのフィードバックに関するアンケート調査の代替として研究成果報告書の様式に変更したことが明示的に示されていない。
- ・ 教員評価のスキームについては、これから基本方針の検討と具体的な体制づく

りを行うという大学の対応は遅きに失している。研究活動の検証体制は重要事項あり、具体的な成果を伴う進展を期待する。

- ・ 平成22年度の産学連携事業に関わる調査については、前提となる「前年度の調査」が行われていなかった。平成22年度に行われた調査は断片的で、これからの産学連携の方向を示すようなものではなく、調査結果を基に「効果的な地域貢献事業の実施ならびにサテライトキャンパスの活用方法について検討を行う」ことができたとは判断できない。

(3) 評価委員会からの意見等

- ・ 入学者選抜方法を改善し、充実させるための方略が感じられない。「現行のままで問題ない」と判断しているように見受けられるが、デザイン学部において入学者の性別が一方に大きく偏っていることに気を配る必要がある。例えば、特別選抜（推薦入学）の実技の必須化、二次試験における実技系の比重を高めること、理数系科目の導入など、入学希望者に対して明確なメッセージを伝える必要がある。
- ・ 3年次編入に関しては戦略的な取り組みが必要である。
- ・ デザイン学部のコース希望者の偏りについては、入試の方法（実技が論文か）とコース選択の傾向との関係を分析する必要がある。空間デザインや製品デザインなどを敬遠する「志望のソフト化」の傾向が感じられる。
- ・ FDのアウトカムは、単位の実質化への方策が見られない、成績評価においてA評価の割合が異常に高い例が見られるなど、昨年度に引き続き満足すべき水準ではない。FD・SDに関して、札幌圏内の大学と連携した積極的な取り組みが期待される。また、その会場としてサテライトキャンパスを有効に活用していただきたい。
- ・ 札幌圏内の大学間連携については、本学としての方針を執行部が明確にして、それを共有したうえで、早急に実現するよう期待する。
- ・ 科学研究費補助金への応募率が50%以下と依然として低迷している。さらなる努力が必要である。
- ・ 大学関連国際機関への参加という中期計画の実施を目指すのであれば、UMAP以外にも大学関連国際機関があるので、そうした機関への参加を積極的に検討していただきたい。

3-2 業務運営の改善及び効率化に関する項目別評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

B（おおむね計画どおり進捗している）

イ 判断理由

この項目についての小項目評価の集計結果では、小項目数33項目に対して、「年度計画を十分に実施している（Ⅲ評価）」と評価された項目が31項目であり、全体に占めるその割合が9割以上であることから、B評価（おおむね計画どおり進捗している）とする。

（参考）小項目評価の集計結果

小項目数	評価結果				Ⅳ又はⅢの割合
	Ⅰ 実施せず	Ⅱ 十分実施せず	Ⅲ 十分実施	Ⅳ 上回って実施	
33	0	2	31	0	94%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

小項目において年度計画を上回って実施している項目はないが、次に掲げる点が注目される

- ・ 平成24年4月の大学院博士後期課程の設置に向けての準備を進めた。

イ 遅れている点

- ・ 学長裁量経費は、戦略的経費である。毎年度剰余金が発生しているなか、補てん的な執行ではなく、大学が様々な地域課題に取り組む戦略的な研究費として執行を期待する。
- ・ 年度計画の設定自体のミス、年度計画の未達成項目があるなど、業務毎のマネジメントサイクルが徹底されていない。特に、PDCAサイクルにおける「C」評価の実施が不十分であると考えられる。

また、PDCAサイクルが現状のサイクルより早めに実施できないこと及び短期間で実施できないことにより、課題が先送りされている。

(3) 評価委員会からの意見等

- ・ 中期計画のうち、特に重点的に推進していくべきことを定めた経営戦略については、進捗が遅れている事項がある。経営戦略の進捗管理と確実な執行が必要である。
- ・ 学内委員会等の各種委員会については、必要性及び教職員の負担も十分考慮して設置・運営を行っていただきたい。
- ・ 教員評価については、教員の教育研究活動等を活性化させる制度の運用になるよう、評価制度の改善を継続的に行う必要がある。
- ・ 適正な教員数の実現については、ヒアリング時に建設途中の大学で、これで確定とは言えないとの説明があった。この説明では、年度計画自体が不適切であったとも言える。教員組織を完成させるために、より戦略的な手法、積極的な姿勢で望む必要がある。

また、教員の職位ごとの計画数がアンバランスである。適正な教員組織についての再考が必要である。

- ・ プロパー職員の育成が喫緊の課題である中、3名も退職している。その要因分析を行い、職員の定着率を高める必要がある。
- ・ 時間外勤務については、昨年度より削減はされているが、依然として事務職員は、膨大な超過勤務を行っており事務改善が必要である。
- ・ 事務職員の意欲・資質の向上を図るための方策として、研修の機会の確保、自己申告制度の導入、所属長との面談を実施している。これら全体が連動した効率・効果的な人事管理を早期に実現していただきたい。例えば、自己申告書に（労働時間削減のための）業務改善の提案及び能力向上策についても記載させる。これらのことについても面談時に話し合うことで、管理職は、業務改善及び階層別・習熟度別の研修計画を検討していくことができる。
- ・ 人事評価は札幌市の人事評価制度を準用した制度で実施していると思われるが、専門性の高い職員を育成する必要があることから、民間企業の職能資格制度も参考に現在の人事評価が大学事務職員の育成に資する人事評価であるかを検証していただきたい。

3-3 財務内容の改善に関する項目別評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

B（おおむね計画どおり進捗している）

イ 判断理由

この項目についての小項目評価の集計結果では、小項目数13項目に対して、「年度計画を十分に実施している（Ⅲ評価）」と評価された項目が12項目であり、全体に占めるその割合が9割以上であることから、B評価（おおむね計画どおり進捗している）とする。

（参考）小項目評価の集計結果

小項目数	評価結果				Ⅳ又はⅢの割合
	Ⅰ 実施せず	Ⅱ 十分実施せず	Ⅲ 十分実施	Ⅳ 上回って実施	
13	0	1	12	0	92%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

小項目において年度計画を上回って実施している項目はないが、次に掲げる点が注目される。

- ・ 看護学部の「学社連携による循環型就業力育成プログラム」が、文部科学省の「大学生の就業力育成支援事業（就業力GP）」として採択され、採択済みの教育GPを併せて約31百万円の補助金を獲得している。

イ 遅れている点

- ・ 研究・調査に係るニーズの把握については、前提となる平成21年度の調査自体が実施されておらず、年度計画の設定自体が不適切な項目がある。

(3) 評価委員会からの意見等

- ・ 科学研究費補助金への応募率が50%以下と依然として低迷している。さらなる努力が必要である。（再掲）

- ・ 「大学生の就業力育成支援事業」に採択され、大型補助金を獲得したことは、財務面からは評価できる。

なお、この事業について、ヒアリング時に全学で推進していくことを強調して説明していたが、平成22年度事業年度業務実績報告書小項目番号7番では「看護学部では就業力GPに採択された」と報告されている。また、本学が発行している当該事業のパンフレットを確認しても看護職の就業力の育成となっている。この就業力GPによりデザイン学部の学生の就業力を育成していくことについては具体的な説明がなく、評価委員会としては、申請は、札幌市立大学であったとしても、実態は看護学部の学生を対象とした取り組みと判断する。

3-4 教育及び研究並びに組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価並びに当該状況に係る情報の提供に関する項目別評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A (計画どおり進捗している)

イ 判断理由

この項目についての小項目評価の集計結果では、すべての小項目において、「年度計画を十分に実施している(Ⅲ評価)」と評価されたことから、A評価(計画どおり進捗している)とする。

(参考) 小項目評価の集計結果

小項目数	評価結果				Ⅳ又はⅢの割合
	Ⅰ 実施せず	Ⅱ 十分実施せず	Ⅲ 十分実施	Ⅳ 上回って実施	
6	0	0	6	0	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

小項目において年度計画を上回って実施している項目はないが、次に掲げる点が注目される。

- ・ 開学から平成21年度までの4年間の自己点検・評価を実施し、報告書を取りまとめるとともに、認証評価機関による評価を受けるために関係書類を作成し、提出している。

イ 遅れている点

遅れている点は特に認められない。

(3) 評価委員会からの意見等

- ・ 公開講座受講者の満足度が高い一方、公開講座の回数は24コマ(前年度42コマ)、受講者数838人(同1,578人)と、平成21年度より大幅に減少している。その要因についても報告すべきである。

3-5 その他業務運営に関する項目別評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A (計画どおり進捗している)

イ 判断理由

この項目についての小項目評価の集計結果では、すべての小項目において、「年度計画を十分に実施している(Ⅲ評価)」と評価されたことから、A評価(計画どおり進捗している)とする。

(参考) 小項目評価の集計結果

小項目数	評価結果				Ⅳ又はⅢの割合
	Ⅰ 実施せず	Ⅱ 十分実施せず	Ⅲ 十分実施	Ⅳ 上回って実施	
10	0	0	10	0	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

小項目において年度計画を上回って実施している項目はないが、次に掲げる点が注目される。

- ・ 大学の知的資源を活用した省エネルギー対策の実証実験を行った。

イ 遅れている点

遅れている点は、特に認められない。

(3) 評価委員会からの意見等

- ・ 一か月の消費電気量から、消費量の内訳を試算し、照明系が約6割、動力系が約4割となっていると分析している。今後も消費量の内訳を分析し、効果的な省エネ対策を進めていくことを期待する。